なんといっても、北アジアに生成した政治権力の形に一つの転機を画した時期でもあるのだから、その性格を徹底的に究めることが、北アジア史の闡明には不可欠のことがらなのである。いまこの種の問題に多くのすぐれた研究をとげられた著者の業績が、御自身の手によって集大成され世に送られたことは、ちかごろ漸く盛んとなった北アジア史研究に稗益するところ大なるものがあるといえよう。

（東洋史研究双刊一二之一　A5版　本文四四四頁　英文摘要六頁
図版四　昭和三九年九月　東洋史研究会刊　定価二二〇〇円）

（明治大学教授）

稲葉正就
佐藤長共訳

フゥラン・テプテル HU LAN DEB THER

——チベット年代記——

金子良太

佐藤・稲葉両教授の御労苦による「旧赤冊」邦訳註の上梓をみたことは、日本西蔵学の水準が世界のチベット史学者のそれと比肩することを意味するものとして、我々チベット学の末席に連なる者にとっても共に欣びとするところである。

従来も「赤冊」の重要性については、学界の関心が集められていたが、特に G. N. Roerich 教授が一九四九年に「青冊」の英訳を出版され、その序論（p. VI.）において「赤冊」の概観に言及されてから、一層の関心を引き、G. Tucci 教授はその入手のため、あらゆる方面を探索し、「新赤冊」を発見したときには、誤ってこれを「旧テブマル」と思い、欣びの余り身震いを覚えたとすら述べておられる（東方学第十二輯〈西蔵の歴史文献〉）。

「赤冊」即ち Deb-ther dmar-po. 通称 Deb-dmar は、別に Hu-lan deb-ther とも呼ばれる chos-hbyuṅ で、チベットで最古とされる原初型の編年記の一つであり、ツァル・グンタン Tshal-guṅ-thaṅ の座主クンガー・ドルジェ Kun-dgah rdo-rje の一三四六年の著になるものである。

「赤冊」原本および流布本探索の過程において、巷間に「旧マ

ルポ史」の原本がラサの医薬院 sMan-rtsi-khaṅ に、また「新マルポ史」がクンデリン寺院 Kun-bde-glin に、夫々蔵されていることが伝えられ、確認されたが、門外不出の封印のされたもので、遂に将来したものはなかった。流布本に関しては、シッキムのデンサパ氏 gDan-sa-pa が「旧赤冊」写本一部を入手所蔵し、また Tucci 教授が、「新赤冊」写本一部をイタリーに将来されていることが報告された。

普通チベット史の研究に我々が用いるのは、チベットで正統的史書と評価されてきた「Bu-ston の仏教史」や「青冊」であった。前者は一三二三年、後者は一四七八年の著作であり、九世紀半ばの吐蕃朝崩壊以降元初までの歴史は間隙がありすぎて不明確な問題が多く残されていた。これを克服するためには、「青冊」などに先行し、且つ典拠とされてきた史料を捜査し、その研究によって歴史の再構成をしなければならない。「旧赤冊」は特に「青冊」や「五代ダライ仏教史」に引用されている最も重要な先行文献の一つである。

「新赤冊」は「旧マルポ」とは全くの別本で、一五三八年頃に hBras-spuṅs の或るラマによって著されたものである。「旧赤冊」流布本ですら、その入手は極めて困難なものであり、カリンポン在住チベット人貴族の間でもデンサパ氏所蔵本を回覧していたほどである。たまたま多田等観師をはじめ多くの我が国チベット研究者が撮影将来した流布本「旧赤冊」を照合してみると、クタの間を廻っていたデンサパ氏所蔵本にほかならなかった。

一方、ガントクのナムゲル・チベット研究所では、デンサパ氏所蔵本を底本に一九六一年「旧赤冊」テキストを刊行した。

佐藤・稲葉両教授は、この活字本テキストを再び流布本写本と校合され、両者間の微細な相違点を註記された。その研究の結果は多大の収穫となってあらわれているが、そのうち重要なものを御紹介すると次の通りである。

一、印刷本はそのままではテキストとしては不充分なものである。

二、Hu-lan deb-ther の作成年次は Roerich 教授の発表したように一三四六年で、作者は Tshal-pa の Kun-dgaḥ rdo-rje である。

三、古代史の部分は Thaṅ-çu thu-han なる書によって書かれているが、この書の名は唐書吐蕃（伝）から来たものと考えられる。Tucci 教授が rGyal-rabs chos-ḥbyuṅ gsal-baḥi me-loṅ に記載される Çu thu han chan を「続吐蕃伝」と解したのは誤りで、本来は Thaṅ çu thu han chan とあったものを、Rgyal rabs は誤って最初の語を脱落したに相違ない。

四、Sa-skya-pa の大ラマ寺については、同時代の故もあって、詳細な系譜が書きこまれており、それによって信頼するに足る系図を作成することができる。

五、Phag-mo gru-pa については Khri-dpon との密接な関係を明らかにすることができる。

六、西夏の開国伝説は、チベット文献のうちでは最も形の古いものが収められている。この伝説は中国文献には全く見ることのできないものである。

七、末尾に、元武宗至大二年の詔が載せられているが、ラマを保護し尊敬することを述べたもので、これも中国文献にないとこ

ろのものである。

八、南シナ語の音訳は多少の訛はあるが、元末明初の音を写したものと考えられ、又当時の中国の官名、人名等にも俗語化したものが取入れられているようである。その意味で言語研究の資料としても極めて興味あるものと考えられる。

最後に蛇足になるが、佐藤・稲葉両教授共訳註「フゥラン・テブテル」を拝読すると、一例ではあるが p. 60 註一二、p. 105 註四六などのような疑問に思えるものも幾つか残されているようなので、この改訂版の出版が近い将来行われるようお願いする次第である。

（B5判　二三二頁　昭和三十九年五月　法蔵館発行　定価一、六〇〇円）

（ケムブリッジ大学講師）